

「衣服が語る戦争」展を見学 文化は戦争の対極にある



堀尾さん（手前左）のお話を聞く

文化学園服飾博物館の「衣服が語る戦争」展（八月三十一日終了）の婦民見学会を八月二十四日に行ないました。

（文化学園大学教授）のお話を聞きました。「九十二年の歴史がある文化学園は、大学の他に大学院、短大、服飾学院、出版局などがあります。文化大学はファッションの大

学、学生は思い思いの服装で自己表現をしています。翻って、戦時中は服装も国家が決めました。一九四〇年の国民服令による軍服を模した国防色の服などです。それも衣料切符がないと買えず、今の学生はこういうことで戦争というものがわかるようです。ファッション誌も国策に沿って『空爆下、この顔この服装を見る』の見出しで派手な人の写真を掲載しています。今ならこの学生は標的になってしまいますね。

国が飼育をよびかけた軍用ウサギは防寒用の軍服や航空機の部品に使ったそうです。革製品には牛革の禁止で鯨や蛙、ウツボ、海亀、蛙も使ったそうです。真鍮のボタンを国が一億個回収しました。同じ年の『七・七ぜいたく禁止令』（奢侈品等製造販売制限規則）では、友禅の着物、人形、レコードなど、生活に必要なものが対象になりました。

戦争の対極にあるのが文化、芸術。文化が栄えるのは戦争のない世の中です。子や孫の世代が豊かな文化を楽しめるようにと願います」

展示では、戦争柄の着物、襦袢などが目を引きました。銃を構えて突進する兵士、爆弾の炸裂、有刺鉄線などが手描きされた友禅や、戦闘機が描かれた着物、日の丸の小旗を振る子ども、凶柄も。男性の襦袢、子どもの晴れ着も同様で、軍服そっくりの七五三の服もあります。

詰め襟やセーラーカラー

見学後「今はリフォームで和服を生かして服にするが、当時は否応なく大事な着物をもんべに変えさせられた」「服を統制されるのは絶対にいや」などの感想を語り合いました。